

1、モンサントによる日本農業の支配構造が完成まじかに・・・。

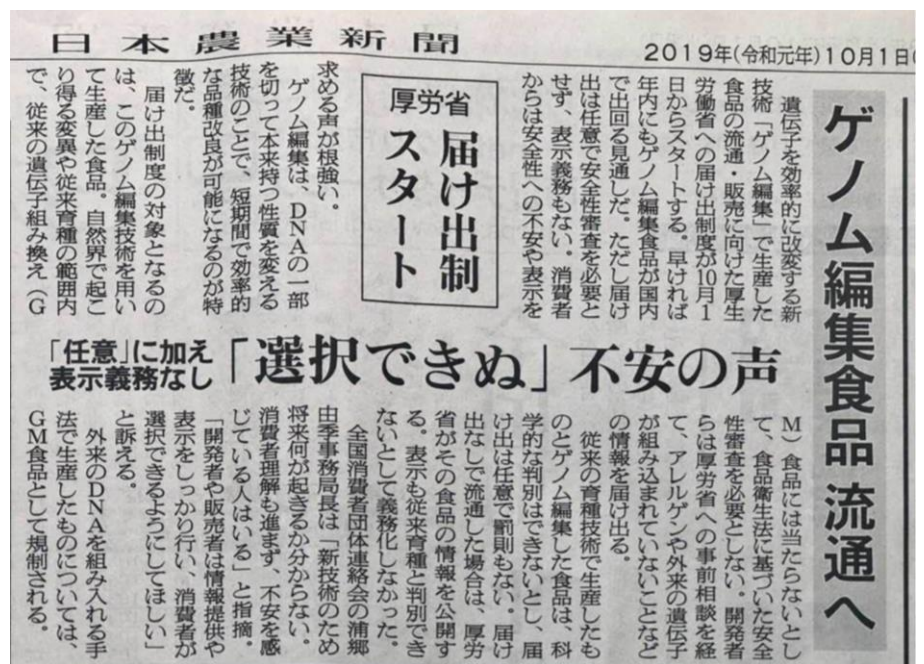
先に日本モンサントによる中高生への遺伝子組み換えキャンペーンの実態をご報告しましたが、ゲノム編集食品の無表示流通の怖さと自家採取禁止をめざした種苗法の改正によって「モンサント法」が完結する事態になってきたことをお伝えします。

1) 消費税増税と同時に10月1日からゲノム編集食品が市場に出回ることになった

今年の10月は真の「神無月」。台風被害に加え、栃木県議会の農林環境部会は、7000名余の署名活動を無視して、イネ・麦・大豆の種子の生産販売を民間に開放する条例を賛成多数で可決してしまいました。この異常な条例制定の悪影響が他県に及びはしないか心配しましたが、幸いにも宮城、茨城など近県の条例制定には全く影響なく、栃木県条例の異常性が浮き彫りになってきました。

種子法廃止の仕掛け人は国際的な遺伝子操作・種子生産企業のモンサント社です。日本の種子メーカーを通じてゲノム編集の種子が栽培されたり、大豆などゲノム編集食品が市場に出回り、それを知らずに種として使えば、遺伝子汚染は一気に広がり日本の有機農業は壊滅です。

9月30日には「第1回有機JASにおけるゲノム編集技術の取り扱いの検討会」が、有機農業認証機関等の関係者を集めて開かれました。会議では、「有機に、遺伝子組換えも、ゲノム編集技術も、「プロセス・ベース」(作出時、生産工程)で、使用してはならない、表示などは「プロダクト(生産物)・ベース」での考え(結果、なくなればよい)はとってはならない、という意見」だったとのこと。ただし、検討会は、「関係者の意見をきく」だけに留まる可能性があります。検討会ののちに、委員会があり、そのあとに、JAS調査会が



あります。アメリカでの動きをみたり、日本における一連のゲノム編集容認・無表示(日有研 久保田氏情報より)スタートをみると、ゲノム編集種子も「有機種子」として認めるという結論在りきの審議になる可能性があります。

9月25日には種苗法改正の第5回検討会が開催されました。傍聴した印鑰さんの話では、検討会で「一律自家採種禁止」の方向が打ち出されたということです。いわゆる種子の独占を狙う「モンサント法」の成立をめざすという事態になってきました。これは種子の独占だけに止まるものではありません。TPP発効前後の動きを整理すれば、日本の未来を担う子供たちが人としての存在を奪われる危機に直面することを意味します。

①2017年主要農作物種子法によって公的機関による主要農作物の種子の安定供給体制が廃止され、そのノウハウと施設がモンサントなどの多国籍企業に売却される準備が開始されました。②同時にグリホサートの残留基準が大幅に緩和され収穫前にグリホサートを散布した小麦・大豆・ソバ・油糧作物などが大量に輸入され、パン・

クッキー・ラーメン・餃子・ビールなど小麦製品のほとんどから検出されるようになりました。

③農薬取締法改定でグリホサートがジェネリック農薬に指定され手続きの簡素化が行われて格安のグリホサートがホームセンターに氾濫してきました。④遺伝子組み換え農産物の表示の厳格化が進められ、「遺伝子組み換えでない」と表示できる輸入大豆は無くなってきます。⑤最後に残ったイネも種子を含めて多国籍企業の支配下に入り、ゲノム編集種子（機能性や耐倒伏性を強化した種子など）が出回る稲作になってきます。

⑥そして、遂に安全安心の砦である有機農産物のJAS規格にゲノム編集作物を取り入れようとする動きと種苗法で自家採取を禁止する動きが始まりました。多国籍企業による食と農の完全支配＝利益のためには手段を選ばないモンサント法の完成です。

黙って見過ごすことは出来ません。①主要農作物の遺伝子汚染を避けるために各自治体で条例制定運動を開始すること。②マスコミが報道しないその危険性を広めること。③イネ・麦・大豆・なたねの循環型有機農業の推進によって有機農産物の地域自給圏を構築すること。④有機種子の保存と安定供給のセンターを充実発展させることなど提案します。

バイオ企業がめざす近未来を描いた会員農家の投稿がありました。幻想であれば良いのですが子や孫の未来のために、全国民が運動できるような行動を提案したいと思います、上記の提案への皆さんのご意見や新たなご提案をお待ちしています。

近未来 —僅か 50 年後の世界—モイジェント社の野望 有田米作(仮名)

今年 2070 年。2000 年ごろからその影響が心配されていた除草剤、殺虫剤、食品添加物、遺伝子改変作物・家畜、マイクロカプセル、人工香料、調味料、保存料など食品添加物、プラスチックの添加剤、プラスチック廃棄物、放射能汚染……数えきれない化学物質と、動植物遺伝子改変などにより地球環境は汚され、人も、動物も植物も汚染されつづけた。

目に見えるところでは植物、昆虫、鳥類、魚類、哺乳類の種類は激減、特定の種類については異常増殖した。細菌類もその様子は激変し感染症などとして、人に襲い掛かった。

人はほとんど間違いなくガンにかかり、平均寿命はじりじりと短くなった。医療費の高騰により、ホスピスという隠れ蓑の中で安楽死が標準となった。

さらに、人は次第に自然には子供ができなくなり、不妊治療は当たり前となった。技術は進歩したが、いつしか遺伝子組み換え、編集技術が人にも利用されるようになった。

お金のある人たちは、自分たちの遺伝子に忠実な健康な子供を持つことができたが、化学物質の影響をもらって受けた生活環境、食事を続けなくてはならなかった人たちは、自分たちの遺伝子ではなく、モイジェント社が開発した標準化された汎用遺伝子のクローン子供を持つことしかできなくなった。標準的子供とは、知能、耐病性、体格、身体能力など平均であり、顔つき、人種の特徴など選択することができる。その組み合わせは無限に近く、同じ顔つきになることは無いと説明されているが……。結局、まじめで文句も言わず、働き続ける能力に優れた大人として成長し、まじめに働いた。性格的遺伝子は、従順でまじめな日本人の遺伝子が利用されたとの噂である。しかし生殖能力はなく一代かぎりであった。彼らもまた、モイジェント社開発の遺伝子の子供を持つことしか道は残されていない。こうして、ついに、モイジェント社は人の一生そのものを支配下に完全に置くことになった。

こうした中、その支配を受けず生き延びている人たちもいた。世界各地に残る自給的有機農業コロニー、国としてはチベット高原に 1 つ残るのみ。その国は 2030 年、すべての農作物を有機栽培に代え、100%の食料を自給し、仏教的国民性での団結が、外部からの化学物質、遺伝子改変技術汚染の侵入を防いでいた。

一方、ごく一部の高額所得者、そして、憎むべきことに、モイジェントと関連会社の幹部は有機、非遺伝子改変の食材と人口環境の中で健康的に暮らしていた。

しかし今、世界各地に辛うじて残された楽園にも、地球的規模での環境破壊の牙が襲い掛かりつつある。大気汚染、気候変動、強烈な紫外線、遺伝子組み換え昆虫・動物の侵入。モイジェント社の策謀。

孤高のチベットの小国、コロニーを中心に人類は再生できるのか……………。

こんなことにはぜったいなりたくない。できることから取り組もう。

注 孤高のチベットの小国、コロニーを中心に人類は再生できるのか ◀それに頼るのは危険です。危機感を持つ人から運動を始めましょう。広めましょう。 (2019. 10. 3 仮想小国にて 稲葉記)